

社会構造にメスを

～常にアップデートが必要～

今回の問題で男性中心の社会構造にメスを入れられたのか。

東京五輪・パラリンピック組織委員会 森喜朗会長の女性蔑視発言は、国内のみならず、世界中から批判された。コロナ禍で様々な制限に苦しい日々を過ごしている中、一瞬にして私たちに明確な怒りがこみ上げた。

今までも差別的発言は耳にしてきたが、そういう人もいると自分を納得させ、その声に耳を塞ぎ、前を見てきた。結果、差別や偏見を許してきたことになっていた。それでも私たちの権利を守るため、ジェンダー平等を訴え、時代を切り拓いてきた多くの女性たちがいる。少しずつではあるが、変わってきた時代に対応できなかった発言が許されない社会になったのだ。

今回は、組織委員会会長という立場がより問題となったが、発言の中にある「わきまえている」という言葉にも女性の置かれている立場が象徴されている。私たちの職場や労働組合でも同じことが起こっていないだろうか。

一連の報道で、「ジェンダー平等」や「クォータ制」の言葉を耳にした。労働組合でも男女平等参画実現に向けた取り組みにあたり、使い続けている言葉ではあるがこの言葉の意味はもちろんのこと、その背景と目的をみんなが理解しているのだろうか。

時代は変わっていく。私たちの情報も常にアップデートする必要がある。力のある人に対してや上下関係の中で、自分の言葉で異を唱えることができるのか、また、考え方の違いに対して真摯に議論ができるのか。今まで我慢してきたことも「NO」という厳しい姿勢を見せていく必要がある。

民主的労働運動こそ、性にとらわれず生きやすい環境を築いていくことができる。一人ひとりが自分らしく生きられる社会を次の世代へ渡していく。

組織強化委員会
委員長 芳野 友子
中央女性協議会
議長 河野 由香里